

## 『別れの秋』

桑原 紀子

青葉の季節に、東南アジアから海を渡ってくるフクロウがいます。鳩くらいの大きさ、丸い頭に黄色い目のアオバズクです。夜になるとホッホ、ホッホと鳴き交わし、日本で子育てをして、秋になると東南アジアに帰ります。

私が能ヶ谷に越してきてから33年、毎年5月末の夜、ホッホが聞こえてきます。多摩丘陵に残る大木の樹洞がアオバズクの巣穴になるのです。

2005年6月の西緑地だよりに、アオバズクの声があまり聞かれなくなったと書きました。今年も6月に、やっと2回聞こえただけでした。ところが7月30日の夜遅く、ホッホ、ホッホと、激しく鳴く声がかかります。命が燃え立つように鳴き続けるのです。恋の叫びなのでしょう。でもそれは一晩だけで、また静かな夜が続き、夏が過ぎていきました。

9月9日の夜。このところ毎晩ウォーキングしている私は、広袴の

調整池近くのケヤキの大木で、ホッホ、ホッホと鳴き交わす声を聞きました。2羽で鳴き交わしています。探すと、ケヤキの下の電線にアオバズクの小さなシルエットがありました。盛んに鳴いています。



アオバズクの風切羽根

セミの羽

蛾の羽

翌日の夜は、声はなく、シルエットをみただけでした。そしてその次の日以来、アオバズクは姿を消しました。故郷に渡って行ったのでしょうか。

数年前の9月の夜、家族なのか、四羽が電線にズラリと並んでいました。渡りの前の集合です。

シルエットがひとつだった今年の子育ては、成功したのかと気になります。

電線の下を探すと、食痕の蟬や蛾の羽が散らばり、アオバズクの風切羽根が二本落ちていました。

あまり出会えなかったけれど、今年も来たんだよ・・・という挨拶のように。